

## 論文の内容の要旨

論文題目      Yajurveda 文献における Agnicayana  
                    —黒 Yajurveda Saṃhitā と Śatapatha Brāhmaṇa を中心に—

氏 名      伊 澤 敦 子

本論文は序論、本論、結論の三部構成となっている。

序論でまず Agnicayana (火祭壇構築祭) の式次第を記載し、その全体像を示した。この祭式は大規模かつ複雑であり、一度に全てを扱うことは出来ないので、今回は祭火を入れて一年保持する為の器である ukhā 作りからレンガ積みまでの主要部分のみ研究対象とする。

次にテキストについてであるが、Agnicayana は Yajurveda 学派のテキストによって知ることが出来る。その中でも主要部分が載録されている黒 Yajurveda 学派の諸 Saṃhitā (Taittirīya Saṃhitā, Kāthaka Saṃhitā, Kapiṣṭhala-Kātha Saṃhitā, Maitrāyaṇī Saṃhitā) と白 Yajurveda 学派の Śatapatha Brāhmaṇa を扱うことになるので、Yajurveda 学派とそのテキストについて解説し、更に互いに近い関係にある黒 Yajurveda の諸 Saṃhitā の相互関係などの従来説を紹介する。

次に研究史を概観し、序論の最後として、Keith によって作成された上記5つのテキストの対応箇所の一覧表を手がかりに内容ごとの段落に分け、その都度テキストを比較対照する研究方法を提示した。

本論は6つの章から成り、それぞれ「ukhā 作り」「動物供犠と潔斎」「ukhā をめぐる行為」「新しい gārhapatya (家長の火) の設置」「新しい āhavanīya (献供用の祭火) の設置準備」「レンガ積み」と名づけられ、章を追うごとに祭式行為の段階を進む構成になっている。各章は更に細かく区分され、区分ごとにテキストとその和訳が示された後に、規定文に対する解釈の比較が行われ、章の最後にその分析結果がまとめられることになる。

第1章「ukhā 作り」では、Savitṛ 神への献供から ukhā を焼く作業までが含まれる。祭式の始まりの部分として重要だが、すでにここで、これ以後一貫して見られるそれぞれのテキストの特徴やテキスト

間の関係性が指摘されることになる。

第2章「動物供犠と潔斎」では、レンガ積みの前に置かれるとされている人の頭の清めから、祭主の潔斎までが扱われている。これらの部分は構成に関してテキスト間でかなりの相違が見られ、内容にもばらつきがあるという特徴を挙げることができる。

第3章「ukhā をめぐる行為」とは、ukhā を熱する行為から、そこから生じた灰を水に投げ入れる行為までを指す。

第4章「新しい gārhapatya の設置」は gārhapatya の場所を Yama に請うことから始まり、ukhā 中の火と古い gārhapatya の火をレンガを積んで作った新しい gārhapatya に点し、それを敬うことで完了する。

第5章「新しい āhavanīya の設置準備」の新しい āhavanīya とは Agni と呼ばれるレンガで出来た鳥の形をした祭壇のことを指す。実際にレンガを積む前に、様々なことを行うように規定されており、まず祭壇場所を測定し耕すことから始まり、そこに植物の種、土、砂等を撒き、次いで数々の品を置き、動物供犠で得られた動物の頭を置くことによって準備が整う。

そして第6章「レンガ積み」はもちろんこの祭式のクライマックスとして多くの紙数が費やされる。第1層から第5層までに各層に分け、更にそれを積まれるレンガごとに細分化する。この章では更に層ごとにまとめを付し、比較対照の結果の整理と分析に努めた。特筆すべきは第4層で、諸テキストの相互関係が、他の層と異なりかなり入り組んでおり、Kāthaka Saṃhitā は同一の規定を2箇所収録している場合があり、その文言が一方は Taittirīya Saṃhitā と一致し、他方は Maitrāyaṇī Saṃhitā と一致している。これは第1層からここに至るまでずっと指摘されてきた Kāthaka Saṃhitā の特徴—他の両方の Saṃhitā と共通する部分を多く持つ—が顕著に表れた例として注目される。

結論では、それまでの研究で得られた結果を、1. 黒 Yajurveda Saṃhitā の相互関係、2. 黒 Yajurveda Saṃhitā における Prajāpati、3. Śatapatha Brāhmaṇa における Prajāpati、4. 黒 Yajurveda と Śatapatha Brāhmaṇa の関係、とに分けて論じる。

まず1で黒 Yajurveda Saṃhitā の実際の相互関係の特徴を総括し、従来の説と異なっている点を指摘する。次に、Śatapatha Brāhmaṇa では常に中心的存在である Prajāpati (創造神) が、黒 Yajurveda Saṃhitā においても要所要所で言及されることに注目し、2では Prajāpati が黒 Yajurveda Saṃhitā においてどの場面でどの様に言及されているかを挙げ、3では Śatapatha Brāhmaṇa のそれに対応する部分で Prajāpati がいかに扱われているかを、他の場面の描写も視野に入れて論じる。以上の2項の分析で得られた結果をもとに、4で Śatapatha Brāhmaṇa において、黒 Yajurveda Saṃhitā における Prajāpati がいかに意識され、その機能や特質がどの様に変化していったかを探り、結論とする。